

Title	ブリコラージュ概念からみる被災地の地域食堂の実践
Author(s)	王, 文潔
Citation	共生学ジャーナル. 2021, 5, p. 76-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79053
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ブリコラージュ概念からみる被災地の地域食堂の実践

王 文潔*

Bricolage Perspective on the practice of local cafeterias launched in disaster-stricken areas

WANG Wenjie

論文要旨

本稿の目的は災害を機に支援を始めた人々の活動の創出過程を明らかにし、そこに現れる既存システム外の選択肢の重要性を提起することである。そこで本稿では、熊本地震と平成 30 年 7 月豪雨の被災地で立ち上げられた潜在的被災者向けの地域食堂の実践現場に、「ありあわせのもので何とかする」というブリコラージュの概念を用いてアプローチすることを試みた。それぞれの実践プロセスを「食堂運営者の手元にある資源——利用可能なリソースによるレパートリー」、「新しい目的のための資源のやりくり——レパートリーの編集・拡張作業」の視点から捉えた。その結果、災害支援の文脈において物的・人的資源の潜在的有用性が再発見されていることや、多様な制限に立ち向かうための新たな資源の獲得が行われていることが確認できた。新規参加者の個性的な支援創出過程で活用された資源の意外性や資源獲得ルートの偶然性は、災害支援の「ほかでありえた可能性」を示唆している。

キーワード ブリコラージュ、災害、地域食堂

Abstract

This paper aims to promote understanding of the dynamics of creative support in resource-poor environments for latent victims of disasters. The existing literature provides important insights on the practices of experts during disasters via the notion of improvisation, but also suffers a lack of systematic discussion of practices outside expert systems. Here case studies are conducted of two local cafeterias launched by private citizens in the aftermath of disasters that took place in Japan recently. From the perspective of bricolage, the idea of “making do with what is at hand”, both the outcomes and processes related to the cafeterias are discussed. By re-imagining the value of material and non-material resources, the cafeteria organizers were able to mobilize a creative disaster response that was beyond the abilities of experts and the existing system. The analysis of the two cases shows the importance of bricolage as a tool of value creation rather than of value appropriation.

Keywords: bricolage, disasters, local cafeteria

* 大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 ; bunketsuou@gmail.com

1. 研究背景と課題

災害が「日本社会の『暗黙の前提』」を「限界的状況として浮かび上がらせている」（竹端 2012:142）。中でも、災害によって発生するニーズに応じる処理能力が足りないため、災害支援に踏み切れない専門集団・組織や、社会福祉協議会、行政といった準・公的機関のシステム不全が暴き出されている。このように、既存の支援システムに包摂されない被災者に対して「自分でもなんとかしなくては」と非当事者をも巻き込む状況が作り出されている。このような現状を踏まえても、災害時の潜在的ニーズに対して支援活動を行う担い手として、災害ボランティアの存在が注目されている。

災害ボランティアによる支援活動において、災害をきっかけに自発的かつ継続的にニーズを掘り起こし、物的・人的資源を確保するという自己組織的な動きが観察される。災害時にかかわらず、「それが本業では『ない』」とか、市場経済に取り込まれ『ない』という否定の力によって既存の社会に再検討の機会を誘発し、新鮮な代替選択肢を提示することこそがボランティア活動の存在意義であると渥美（2009:20）によって指摘されている。さらに渥美（2001:43）は災害ボランティアが有する「実力」について「提供する専門知識を参照して、様々な組織と連携しながらもあくまでも既存のシステム外にとどま」り、「システムに内在する論理に拘束されず、柔軟に想像力を働かせて臨機応変に対応する」と述べている。公的事業の下請けでもなければ、社会福祉法人などの組織にも属さない支援者の立ち位置を、鴻巣（2018:49）では「寄る辺のないフリーランス」と表現している。このような立場を選んだからこそ、システムの『隙間』を作るのではなく『隙間』を埋め続けるアクションの担い手」として、枠付けや線引きをせずに様々な当事者に対応できると指摘している（鴻巣 2018:49）。本稿では支援活動を手伝い、既存ボランティア組織の活動を補助する一員としてのボランティアと区別して、主体的に既存構造の外に新たな選択肢や可能性を広げる、自ら責任を担うボランティアを「災害支援の新規参入者」と呼ぶ。このような既存システムでは応じきれないニーズに対応し、職務として内容がルーティン化されない支援活動を行うことの困難さは改めて指摘するまでもない。本稿の問題関心の中心はこうした新規参入者の実践がどのように行われて

いるのかという点にある。

支援の創出過程が既存研究でも多く言及されている。避難所で人々が知恵を出しあう場面（竹沢 2013 など）や、災害支援団体の立ち上げの経緯を記述する事例（渥美 2001; 金井 1997; 西條 2012; 立木 2016 など）をはじめとする、支援活動の試行錯誤や様々な課題を乗り越えるための工夫に関する記録から、支援を創出するプロセスの一端が垣間見えてきた。災害対応の特徴として、「臨時に寄せ集められた人々が、知らない人同士で、慣れない場所で、日頃やらない仕事をする事態」（林 2015:3）とあげられている。また山下・菅（2002:182）では「思いもしないことの連続で、マニュアルもない中、当たって砕けろという感じだった」という支援現場の声が取り上げられている。「何とかやってみよう」、「やってみないと分からない」といった状況に、新規参入者のみならず、救助現場に居合わせた人々や、支援にあたる行政職員及び経験豊富な災害支援の専門家も常に直面している。

渥美（2001; 2008; 2014 など）は災害支援現場でよくみられる「ルールを臨機応変に変更しながら展開する」（渥美 2008:212）動きの実践知を、「即興」という概念から整理した。しかしこれらの研究の問題点として王・稲場（2019）は、即興のブリコラージュの側面の議論不足を指摘している⁽¹⁾。即興という概念は高い専門性を有する必要最適規模のプレイヤーを対象とする事例を分析するには有効であるが、寄せ集められた者・ものを前提として支援活動を論じるには限界がある。つまり災害支援経験のない人々にとっての「臨機応変」とは何か、臨機応変に至るまでのプロセスは何かという問いが置き去りにされている。このため、特に新規参入者の支援活動の創出プロセスの実態は、十分に明らかにされているとは言い難い。そこで本稿では新規参入者によって運営されている被災地の地域食堂の事例を捉えるうえで、即興と意味合いが類似しているものの、「ありあわせのものに基づいたやりくり」作業を強調するブリコラージュ概念を用いる。

新規参入者による支援がどのように行われてきたかをブリコラージュ概念でアプローチしていくことは、創出過程に浮上する各々の者・ものの重要性を認識する（Corbett-Etchevers et al. 2014）ことでもある。こうした各々の者・ものの本来とは異なる用途や役割が新規参入者によって見出され、彼ら彼女らの支援を築き上げる。当然こうした既存システム外に位置し、意外性や偶然性に富んでいる実践を、マニュアル化するような普遍化作業とは別

に考えるべきである。なぜなら、災害を機に活動を始める新規参加者の活動は、潜在的被災者を活動の中心に据えていても「できる人が、できるときに、できることをする」からである。竹端（2012:153-155）は自らが福祉現場に携わってきた「体感智」として、「普遍的で規範化できる『正解』よりも、矢守（2009:32）が主張する「当面成立可能で受容可能な……『成解』」こそが現場に求められている「知」であることを強く訴えている。正解を追求するあまり、「出来ない理由を一〇〇並べ」でも『出来る方法を一考える』という柔軟さを失ってしまうことが懸念されている（竹端 2012:155）。NPOなどの市民活動の成果を誰が評価するかという課題が残されており（田中 2011）、そもそも支援を受ける複数の利用者、資金・物資の提供者、支援者など多様な主体にとっての「正解」があるとは言い難い。過去の「正解」だと思われるものを参照しつつも、「該当フィールドにとっての最適解」つまり、時間・空間的に依存している「成解」に落ち着く。

したがって本稿固有の意義は、支援活動の試行錯誤の存在を指摘することにとどまらず、新規参加者の支援の創出プロセスに現れている「ありあわせのものに基づいたやりくり」を少しでも精緻化することを通して、災害支援の普遍的な「正解」を探すのではなく、それぞれのフィールドでの「成解」を尊重し、その「成解」に至るまでの各要素の重要性を指摘することである。

2. 調査概要

本稿で取り上げるのは、熊本地震被災地である熊本市の地域食堂 A、平成 30 年 7 月豪雨（以下豪雨災害）被災地である倉敷市の地域食堂 B である。両者はいずれも災害後に立ち上げられ、みなし仮設入居者、在宅避難者を対象として始められた食堂である。その中でも食堂運営のキーパーソンである食堂 A の発起人 M 氏と食堂 B の発起人 K 氏に注目する。

地域食堂 A については 2018 年 10 月から 2020 年 1 月まで計 10 回、地域食堂 B では 2019 年 5 月から 12 月まで計 6 回にわたり参与観察を行い、それぞれの食堂の発起人 1 名および共同運営者 2 名に対するインタビュー調査を実施した。M 氏と K 氏に対して複数回にわたってインタビュー調査を実施したほか、その他の地域活動に参加した際にも同行し、関係者との関係

性を観察した。また複数の食堂の参加者を交えた話し合いの場でインタビューを実施した際に、運営者が想起できなかった点が参加者によって補足されたこともある。

以下、地域食堂 A、B の基本情報を紹介する。熊本市地域食堂 A は保育サービス事業者 M 氏を中心としたスタッフ 3 名の体制で、神社所有の集会所で運営されている。食堂 A の運営は地震から一年半後の 2017 年 9 月からスタートし、2020 年 9 月現在も月に 1 回の頻度で継続されている。運営資金に関しては地震後支援ネットワーク組織が分配する少額の資金、参加者の会費（大人 300 円、小学生以上 100 円（お手伝いをすれば無料）、みなし仮設入居者は無料）で賄われる。メニューは運営者 3 人とその家族が作ったおかずである。参加者は 10～40 人で、現在では開催場所の地域外の子育て中の母親が中心となっている。その他の参加者としてはみなし仮設入居者が全体の 1～3 割を占めており、その半分が男性である。倉敷市地域食堂 B は地元で飲食店を 20 年以上経営している K 氏夫婦を中心に、夫婦が所有する飲食店で運営されている。資金ツールはクラウドファンディング、参加者の会費（大人 200 円）、募金など多様である。食堂 B の運営は 2018 年 12 月（豪雨災害から約半年後）からスタートし、2019 年 12 月に終了した。開催頻度は最初の半年間で月 2 回、その後月 1 回に変更した。メニューは参加者と一緒を作る手巻き寿司である。参加者は 15～30 人と変動しており、みなし仮設入居者、在宅避難者とその家族、友人が 9 割を占め、参加者の半分が男性であった。次節では、食堂活動が急増する社会背景と災害の発生という二つの、食堂 A、B 設立の背景を踏まえ、M 氏と K 氏が捉えている食堂運営の目的と類似している食堂の中の位置づけを明確し、両者の事例を取り上げる理由を提示する。

3. 食堂 A・B の設立目的と位置づけ

近年子ども食堂、地域食堂、コミュニティカフェと名付けられる活動は、その親しみやすいイメージや地域活性化における効果が期待され、認知度も高まってきた（杉岡・畠山 2016; 朝日新聞 2018）。本稿の調査対象者 K 氏と M 氏の支援活動が食堂という形で行われているのは、こうした社会背

景の影響もみられる。また食堂 A、B のそれぞれの設立時期は、熊本地震発生から一年後と、豪雨災害発生から半年後であった。それぞれが地域食堂、子ども食堂といった名称を使い、被災者を含めた地域住民の居場所づくりを目的とした活動を始めている。

まず M 氏が食堂を設立した当初、食堂をみなし仮設被災者、在宅被災者の交流スペースとしながらも、地域の住民や子育て中の母親など、対象者を限定せずに情報を広げた。設立当初は「ごはんが目的ではなく、おしゃべりをしてもらおう」という「一応の目的はある」と M 氏が振り返っていた。食堂の運営は最初の 1 人から 1 年間で 40 人まで増えた。M 氏自身が保育サービスの仕事をしていることもあり、次第に子育て中の母親が集まってくることを M 氏はある程度予想していた。また第 6 節で詳述するが、個人情報保護の観点から、みなし仮設入居者の住所は行政によって管理されているため、民間支援者によるアプローチが困難であるが、M 氏がつながりをもつようになったみなし仮設に入居している高齢者数名が食堂に参加している。参加するたびに M 氏が世間話の中でそれぞれの生活状況や住宅再建の確認を行い相談にも乗る。高齢の参加者は 2020 年 1 月現在自宅再建ができたため、余裕も出ており少しずつ食堂の手伝いもできるようになった。またみなし仮設入居者と知らずに支援を続けていたこともある。M 氏とみなし仮設の高齢者と話した際に、一年間も食堂に参加していたある母親が突然「実は私もみなし仮設に住んでるよ」と言い出した。「家賃ただでいいよね」とほかの被災者から嫌味を言われる場合もあるため、「みんな自分から言わないよね」と、みなし仮設に住んでいてもそれを他言できない人の気持ちに M 氏は気付いたという。この参加者はその後仕事を始めて食堂の参加頻度が少なくなった。このようにみなし仮設被災者への支援は、被災者の回復や生活状況の改善をもって役割が終了する。

一方で、M 氏は「これから大人社会もどんどん変わっていくだろうし」と捉え、対象者や運営目的のゆるやかな変化を視野に入れている。食堂開始から 2 年半が経過した時点で、M 氏が筆者に語ったのが、子ども時代の記憶と老後の人生への考えだった。彼女は「お母さんが遅かったときご飯食べて行きなっせ」と普通に近所の人から声をかけられる環境で育ったことを振り返り、自分が「年老いて 1 人になった時、孤独な食事は嫌だ」と語った。そのために、現在の食堂活動を継続して数十年後食堂活動が広がっていた

ら、「私も普通に食べに行ったらよかたい(いいじゃない)!？」と期待を込めて食堂を継続したい気持ちを吐露した。上記のように、M氏は参加者にあわせてゆるやかな活動目標をもちながら、自分も地域の一員として継続して関わる地域活動の延長線上に、被災者支援を位置づけていることがわかった。

食堂Aに比べ、食堂Bの設立とその後の変化にもみられるように、食堂Bは災害後に発生したニーズに対応する急性のものである。豪雨災害発生後、真備地区の床上浸水被害を受けた在宅被災者が、約3カ月もの間、自宅で調理ができないという事態も起きている。そのため、K氏が在宅被災者やみなし仮設入居者を対象とした物資や食事提供の活動に参加した。これらの活動の場でK氏が経営している飲食店の住所を知った被災者がその後店に挨拶に来るようになった。そこでK氏が被災者たちのつづやきから、みなし仮設入居に伴う生活上の情報不足や、同じアパートに住んでいる被災者だと思われる人に声をかけるきっかけがないという悩みを知り、居場所づくりのような活動がしたいと考えた。後述のように様々なボランティアからの情報を整理したうえで、自分ができることから考え、自分が経営する飲食店を営業時間外に開放し、食堂の運営をスタートした。「最初の頃は(参加者)みんな暗い顔して、誰も口きかんし」とK氏が振り返っていたが、現在では老若男女を問わず、地域住民のボランティアやみなし仮設被災者、常連客などの参加者で会話が盛り上がる場面が多くみられ、特に明るい表情で動き回るようになったという子どもの変化に驚いた保護者の声も聞かれた。また食事終了後もその場に残り続ける数家族の参加者が、非常に具体的な子育ての問題を相談しあう場面もあった。食堂の参加を通して被災者の個人間のつながりが形成され、また被災者も元の生活や仕事に戻り参加頻度が少なくなったことを顧みて、K氏たちが食堂を終了するという形を取った。上記のように、K氏の食堂運営は設立当初は被災者支援を目標としていたが、次第に多様な地域住民を巻き込む形となっていくた。

続いて運営モデルが類似しているその他の食堂活動との違いと共通点を踏まえ、食堂A、B両者の位置づけを明確にする。湯浅(2017)は子ども食堂を対象とした議論で、ケア付き食堂(個別サポート型)と共生食堂(地域づくり型)という理念型を提示している。また現実の食堂は「両者の機能を幾分かずつでも併せ持っている」ことが指摘されている(湯浅2017:82)。先

述のように、食堂 A、B の運営者が意識している参加者、つまりみなし仮設被災者や、在宅被災者、子育て母親、地域住民、には一定の指向性がみられるものの、基本的に参加対象を限定しないことが明らかであった。また被災者を中心として地域住民をも巻き込んだ「共生食堂」としての機能が顕著である一方で、被災者や参加者の相談を受けるという機能を併せ持っている。さらに M 氏と K 氏両名は、いずれも貧困の子どもに特化した目的で食堂を運営していないことを明示的に述べている。M 氏は「貧困なのは子どもではない。『子ども』に特化しても子どものためにならない」という考えを示した。K 氏は食堂 B の開催情報を発信する際に「『子ども食堂』は世間の関心が高く話題として取り上げてもらいやすいから、『子ども食堂』という名前を使うこともある⁽²⁾」が、「うちの食堂は普通の（子ども食堂の）イメージと違う」と語った。実際に食堂 B では「子ども食堂なのに、年寄りばかり」という冗談を言う高齢の参加者の声も聞かれる。上記のような食堂の名称や運営課題に対する M 氏と K 氏の思いと、実際の参加者の属性を考慮し、本稿では「地域食堂」として食堂 A、食堂 B を取り上げた。

食堂 A、B を含んだ食堂活動の個々がおもつ特徴や独自性は地域内で競い合う結果ではなく、それぞれの運営者の思いが活かされ、運営者の経歴や実施場所の立地、周辺環境によって形成された「個性的」なものである。個性のかつ多様なあり方をそれぞれ模索できることこそが、食堂活動が全国で展開されている原因だと考えられる。災害発生後、M 氏と K 氏は単発のボランティア活動や物資支援など様々な選択肢の間で揺らぐ中で、子ども食堂、地域食堂という形が、最終的に彼女らが目指す居場所づくりのイメージに最も近いものであった。そして食堂という形で少なくとも 1 年以上支援活動を継続した結果、彼女らが設立した当初に抱いていた目標はゆるやかに実現に至ったと言える。当然、本稿で取り上げた彼女らの思いや現場でのやりくりは、地域復興や平常時の食堂運営活動にとっても示唆に富むものであろう。しかし食堂 A、B の事例を通して、貧困問題や地域づくりのための子ども食堂、地域食堂のあり方を問い直し、新たな改善策を提示することは、本稿では目的としない。

既述の通り、災害時の支援にすぐ動員できる人員や資源をもつような団体的な活動でないにもかかわらず、被災地住民である M 氏と K 氏は個人ベースで仕事仲間や家族と共に主体的な支援活動を行っていた。本稿の目的

は、災害支援の新規参加者である M 氏と K 氏がどのようにして食堂という形で被災者支援を行うことができたのかを明らかにすることである。個人情報への壁によりアプローチしにくい在宅被災者、みなし仮設被災者への支援活動のノウハウが顕在化してこなかったという社会課題に、本稿を通して示唆を提示するものである。したがって本稿の問いを明らかにするために、ブリコラージュの概念を糸口として、M 氏と K 氏それぞれの食堂運営の発想から、ある程度目標が達成できた現在に至るまでのプロセスにある各要素を整理する必要がある。

4. ブリコラージュ概念の導入

「ブリコラージュ」とは文化人類学者レヴィ＝ストロース (1976) が提唱した概念であり、エンジニア (科学者) の科学的な思考とブリコール (器用人) の野生的思考を区別するために用いられた概念である。エンジニアは目的のために意図的に材料を収集するのに対し、ブリコール (ブリコラージュを行う主体) は『『もちあわせ』、すなわちそのときそのとき限られた道具と材料の集合で何とかする』(レヴィ＝ストロース 1976:23)。レヴィ＝ストロースによって提唱されたブリコラージュの概念は、組織学や起業家論など多岐にわたる分野で理論の発展を遂げてきた。

レヴィ＝ストロースによれば、「科学者が構造を用いて出来事を作る (世界を変える) のに対し、器用人は出来事を用いて構造を作る」(1976:29)。この点においても「制約があるからしかたない」のではなく、「困っている人がいるのに、なんで助けることができないのか」という思考様式から、ブリコラージュは「弱者の武器」(井上 2011:28) として捉えられ、構造の暴力への対抗志向のもとに当事者とともになされる活動に応用されている。また玄田 (2018:242) はブリコラージュ的な対応を「即応的対応」と表現し、「あわせて即興や瞬時の判断を伴うブリコラージュには、多様性のある社会の帰結としての、他者に対する寛容性や好奇心、さらには豊かなコミュニケーションなどに関連性が高い」と述べている。ブリコラージュの実践として、法的定義によって就労できない障害者の優れるスキルを発見し、さらに訓練を加えることによって雇用先の重要な戦力になる事例も報告されている

(ゲン 2019)。このように、ブリコラージュの実践にみられる様々な制約の壁に立ち向かうというスタンスは、本稿で捉える災害時の潜在的ニーズに対応する新規参入者の実践にも共通している。

ありあわせの資源で新しい問題に対処する、一見混沌としているようなプロセスを解明するための方法は既存研究で検討されている。ブリコルールがもつ「利用可能な資源によって構成されたレパトリー」はブリコラージュ理論の中心を占める。ブリコルールは常にレパトリーと向き合い、「道具材料と一種の対話を交わし、いま与えられている問題に対してこれらの資材が出しうる可能な解答をすべて並べ出してみる」(レヴィ＝ストロース 1976:24) ことを繰り返している。その中である資源と別の資源との関係性を見出し、作り出すというような、資源間の「類縁性」を認識する作業が行われる。この作業は内田樹の文芸作品の中で「人間がこれまで拾い集め、蓄え、作り上げてきたすべてのものに向かって、『でも、これにも何か使い道があるんじゃないかな?』」(内田 2010:108) という問いかけと直感的に表現されている。ここで問題とされるのが、有限数の「ありもの」を「使い捨て」ではなく、他のものと組み合わせて「すりこぎ」として使い、あるいは新しい文脈に置かれ直して「別の相面を示す」など使い回しをすることで、いかに新しいパフォーマンスを達成できるかということである(内田 2010:102-109)。このような「類縁性」を発見するために、常識や慣習に縛られずに資源のほかでありえた可能性を問いかける意識がブリコルールの中で必要であろう。

前述のように、新規参入者は災害時の公的機関や専門家による対応の機能不全を補うだけでなく、創造的な支援活動を展開することもある。既存システム外の立ち位置を選んだからこそ、既存システムにおける慣習や常識に定められた枠からはみ出すことができる。これに関して、ブリコルールがもつレパトリーは「異質的・限られたもの (heterogeneous but finite store)」

(Innes and Booher 1999:15) によって構成されていると指摘されている。つまり、ブリコラージュは一見ニーズを満たさない者・ものでも使用することが前提とされている(王・稲場 2019)。ニーズに対応するための適合的な者・ものよりも、一見ニーズを満たすことができない者・ものの活用に創造性が秘められている。たとえば関(2014:73)は「専門家システムが不全になるなかで、ボランティアに付与されている『素人』という表象は、ボランティア

の限界を示すというよりは、むしろ可能性を表している」と述べ、災害支援を専門としないボランティアもどこかの分野の専門家であるはずだと指摘している。。Baker and Nelson (2005) の研究でも、独学のスキルの活用が新しく有用なサービスの提供につながったと示されている。災害支援を専門としない新規参加者にとってみれば、本来の職業とは異なる分野に踏み込むこと自体、自らの潜在的な社会役割を再発見することである。ブリコロールにとってレパートリーの中の各要素は、「固定された意味の体系に組み込まれて」いないため、それぞれの「潜在的な可能性」が浮上する(井上 2011:24)。また既存研究では必ずしも明確に取り上げられていない、「ブリコロールはなぜ自分をブリコラージュしなければならない境地に身を投げ込んだのか」を明らかにすることは、ブリコロールの実践を理解するには不可欠である。

「災害支援は自分でもできる」、「災害支援をなんとかする」という認識はどのように形成されたのか。田辺 (2002:12) は空間的連続性を有する従来の共同体の概念と区別し、「コミュニティ」という言葉を使い「実践が生成し続ける場所」に注目している。また田辺 (2002) では、ハイデッカー (1960) の「世界性」の議論を踏まえ、日常実践の生成を再帰的コミュニティの中で探求する視角を提示している。「再帰的コミュニティでは、『投げ込まれる』場所と『自らを投げ入れる』場所との二重性のなかで実践が生み出される」と述べられている(田辺 2002:14) ^③。この再帰的視点から、本稿の調査対象者が支援活動に参加する意識が生成する前に身を置くコミュニティを捉えることも重要であろう。こうしたブリコロールを取り巻くコミュニティで行われる「集合的ダイアログ」の存在もあげられる (Corbett-Etchevers et al. 2014)。ブリコロールのもつ資源を活用する能力は、物的資源、人的資源とともに「手元にある資源」として捉えられるべきである (Barney 1996 など) という既存研究の主張に対して、グエン (2019) は活用する能力という抽象的な単位での資源をより精緻化する余地が十分であると指摘している。たとえば、「ブリコロールの心理的側面、特に彼らの回復力や自己効力感」の重要性が指摘されている (Duymedjian and Rüling 2010:149)。またブリコラージュの実践を導くまでのブリコロールのキャリアに着目 (Stebbins 1996) し、支援活動に至るまでの社会活動の経験の蓄積という「内在的必然性」(竹端 2012) にも目を配る必要がある。そこで本稿は調査対象者である二人の

食堂運営者がもつ物的資源や人的資源に加え、食堂運営を開始するまでの経歴や、彼女らが接触する支援活動のコミュニティ、実践する中で貫き通した信念などを通して、それぞれ「手元にある資源」を整理する。

既存研究の問題点として、グエン（2019:38）は『手元にある資源』の中から新結合に活用できる候補資源を抽出できるのか、資源間の組み合わせをどのようにしていけばよいか……そのプロセスに目を向けた研究』は少ないと指摘している。その原因としては、第三者とブリコルールとの間の「認識の非対称性」（グエン 2019）が考えられる。つまり資源の制約も潜在的有用性もブリコルールの個人の主観的認識によるものであり、それらは必ずしも言語化できるとは限らず、第三者からみれば、やりくりの結果しか認識することができない。それどころか、なぜやりくりできるのかを理解することが極めて困難である。そのためグエン（2019）は、Baker and Nelson（2005:333）のブリコラージュに対する定義——『手元にある資源』（resources at hand）のみで『新しい目的のための資源の再結合』を実現し、『やりくりすること』（making do）によって問題を解決していく——という認識プロセスをもとに、既存の理論を整理・検討した。そのうえ、ブリコラージュの実践を認識するために、ブリコルールの手元にある通常の資源の単位をさらに細分化し、それぞれの構成要素を多様な文脈から再評価するという解剖学的なアプローチを用いている。同じくこれまでの研究でも、再帰的ダイアログと集合的ダイアログからブリコルールの主観的な側面に迫りつつも、手元にある資源でやりくりした結果に対する考察に焦点を合わせている。たとえば、既存資源を本来の目的とは違う用途に使用することや、必要な資源を代用するために、既存の資源をそのまま使用する（レヴィ＝ストロース 1976）ことに加え、複数の資源の配置を変えての再結合（Duymedjian and Rüling 2010）、「欠如した資源……の補填」（グエン 2019:44）など、レパトリーに対する様々な編集・拡張作業が確認されている。課題解決のためのやりくりはこうした「時間の経過とともに蓄積されたレパトリーの存在に依存する」（Duymedjian and Rüling 2010:148）。このように資源がどのようにブリコルールの実践に活用されているのかを分析することによって、資源を活用する能力及び実践の特徴についても、より接近することが可能であると考えられる。したがって本稿では、ブリコラージュの実践を捉えるにあたって、様々な人的・物的リソースの潜在的価値が再認識、活

用、追加、創造される「レパートリーの編集・拡張する」作業を詳細に描きたい。

上記にて示したブリコラージュをめぐる諸議論を踏まえて、5節と6節では「食堂運営者の手元にある資源——利用可能なリソースによるレパートリー」、「新しい目的のための資源のやりくり——レパートリーの編集・拡張作業」に分け、事例とその分析を通して災害時の新規参加者の支援創出プロセスを捉える。

5. 食堂運営者の手元にある資源

5.1 運営者 M 氏・K 氏の経歴

先述の通りブリコラージュのプロセスを通してレパートリーが変容することがあるが、表1は、活動を始める前から持っているリソースを中心に、二人のブリコルールがもつレパートリーをまとめるものである。本節と次節で使用する「リソース」は、レパートリーの編集・拡張する作業が行われた結果としての「資源」と区別し、新たな目的に向けての有用性が発見されていない状態の要素を指す。

表1 食堂運営者 M 氏・K 氏の経歴と社会活動への参加状況

	熊本市地域食堂 A の発起人 M 氏	倉敷市地域食堂 B の発起人 K 氏
年齢 性別 職業	50代女性、熊本出身・在住、保育サービス事業者、元看護師	40代女性、岡山出身・在住、地元で20年以上存続する飲食店の経営者
被災状況	住む家が一部損壊	ほとんど被害なし
資格	保育、メンタルケアの資格 (食堂を始めて1年半の時点で食品衛生責任者資格を取得)	飲食店経営者であるため、食品衛生責任者と防火管理者の資格、食品営業許可を取得

経験	仕事やプライベートで様々なチームと関わる中で身につけた協調性	長年の飲食店経営で身につけた接客術
災害支援活動の参加	音楽ボランティアや炊き出しボランティアの活動、災害支援ネットワークの加入など	飲食店の駐車場をボランティアの車中泊の場所として提供、炊き出し、支援団体の立ち上げ、物資の調達や配布など
社会ネットワーク その他	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの学校関係者、友人などの地域ネットワーク ・保育サービスの利用者 ・地域食堂ネットワーク 	<ul style="list-style-type: none"> ・隣人、友人、同級生などの地域ネットワーク ・仕入先、常連客 ・飲食店という場所をもつこと

M氏とK氏の両名はいずれも被災地の出身であり、災害を経験し所有する建物が被害を受け、災害後仕事ができなくなる状態に陥ったことがあるものの、自分のことを被災者として認識していない。災害発生後、両名は様々な支援活動に積極的に参加しているが、災害発生前に食堂運営や災害支援について自分に関わることは「考えてもみなかった」と話した。また二人は異なる職業経験を有するが、サービス利用者を相手にする職務でそれぞれ身につけた協調性や気配りが実践の土台となっていると言えよう。そのため災害前から、友人や家族関連の関係性だけでなく、仕事で接してきたサービス利用者とも強い地域ネットワークをもっている。K氏にとって食堂を運営するうえで利用可能なリソースとして、常連も含めた不特定多数かつ多種多様な客だけでなく、飲食店経営に必要な仕入れ先も考えられる。一方でM氏自身が抱えている多種多様な保育サービス利用者だけでなく、仕事上、福祉関係者や医療関係者とのつながりをもっている。さらにM氏は地震直後に地域食堂ネットワークのメンバーにもなっている。M氏とK氏のその後の活動を理解することで、上記の二人のレポーターは実に災害支援に必要なものであるという印象を受けることもあるだろう。しかしM氏・K氏と同様の経歴をもつものの、主体的に災害支援に踏み出すことができない者も多い。食堂Bの最終回において、参加者から「自分ならお

手伝いはするけど、自分から企画して何かやろうと思わん」、「手伝うこととなかに飛び込むことって全然違うから」という声も聞かれた。二人のブリコロールはなぜ災害支援への一步を踏み出すことができたのか、そしてどのように自分のレパートリーと災害支援とを関連付けたのか、次項で論じたい。

5.2 実践者のコミュニティとの接触

既述のように、近年子ども食堂や地域食堂の活動が全国的に展開され、社会的な注目度も高まっている。また新規参加者を応援し、食材や運営経験の共有などの交流を目的として形成された食堂ネットワークが、食堂の広がりさらにさらに拍車がかかっている。M 氏の食堂運営活動はこうした背景で動き始めた。

「地震の少し前から地域食堂が増え始めて……地震後、数ヶ月で、子ども地域食堂のシンポジウムの話が来たけど、その話を聞いて『(地震直後なのに) とんでもない』と思った。……どっちかという巻き込まれた。〇〇ちゃんから『きっと役に立つから』と言われて、〇〇ちゃんがみんなを引っ張った」[M 氏 2018/12/6]

「巻き込まれた」、「〇〇ちゃんがみんなを引っ張った」といった言葉に表れているように、M 氏は受動的に食堂運営の活動に関わりをもつようになった。その後の一年、「やりたい人がやって、私は応援しよう」という思いから様々な食堂で手伝い始めた。その間徐々に表れた心境の変化について彼女は以下のように語っている。

「食堂をやろうって急に思いついたと思われてるかもしれないけど、自分の中で一年かかった。一年間あっちこっち手伝って、(食堂が) 必要な場所だなと思った。私たちもできるよねって変な自信がついちゃった。何をどうすればいいか教えてもらったわけではなくて。見てきた、体感したのを貯めてたからそこがスタート。自分では行き当たりばったりだと感じるけど、偶然が必然になったかな」[M 氏 2020/1/9]

「見切り発車、すべては私の一存で始めたけど、みんな(保育サービス事業

の仲間) 文句を言わずについてきてくれた」[M氏 2019/8/1]

彼女の食堂運営は「見切り発車」であるとともに、「変な自信」「体感したのを貯めてた」「必然になった」状態でのスタートであった。一見矛盾しているようだが、様々なものを受け止める余裕ができたという心の準備とも言うべきものの必要性が示唆されている。M氏が「見切り発車」でも自分の食堂の運営が開始できた理由を、保育サービス事業の職員という仲間がいるからと捉えている。またM氏が食堂の運営を検討していた当時、彼女は地域食堂ネットワークと災害支援のネットワーク双方のメンバーであった。そのため、それぞれのネットワークの目的でもある「食育」と「被災者支援」という二つのキーワードを意識することで、彼女の関心が一層引き起こされたと言えよう。一方で一年間実践の現場で学んだ具体的な事項よりも、彼女が重要な体験としてあげたのは、関わった食堂運営者が周りや地域の人々から理解されなかったものの、最終的に受け入れられるプロセスを目の当たりにしてきたという経験であった。食堂運営の特定の場面での成功や失敗よりも「こういうものなんだ」という認識であろう。こうした心境の変化はK氏の語りでも確認できる。K氏の事例にも着目しよう。

K氏が経営している飲食店は駅に近いので、豪雨災害後ボランティア活動帰りの人々が多く訪れる。豪雨災害の前から彼女はカウンターの裏から料理を提供するだけでなく、ときには意気投合して席で一緒に飲むスタンスだったと、インタビューを実施する際に常連客が話した。災害発生後の数カ月は、「ほぼ毎晩毎晩、(ボランティアたちと)飲んで語り合っていた」という。その時の状況はK氏がこのように振り返っている。

「いろんな災害ボラさんと初めて会ったけど、お酒飲んでずっとしゃべれるから。顔なじみがどんどん増えた。『オカン(K氏)としゃべりたいから』と同じボラさんが県外から2、3回と来てくれるようになった。……夜お風呂に入って、ふと落ち着いたときに、ちゃんと今度同じ支援者として話せる立場だったらええやん。私は被災者じゃないし、ボランティアで来てくれる人の気持ちがすごくわかる。そういう立場でおいたかった。……だけどこっからどうすればいいか毎晩毎晩悩んでた。……意地でしよった」[K氏 2019/7/21]

「今度は同じ支援者として話せる立場でおりたかった」という意識は誰からの押し付けでもなく、ボランティアと対話や交流を深めるなかで自然に芽生えたものであろう。悩んでいる彼女に災害ボランティアから活動内容の提案をされ、他地域での応用例も紹介された。どのような活動をすればいいかと悩む K 氏が店に訪れたボランティアに相談したところ、「集まる場所が良くてボランティアのおじさんからアドバイスをもらい、また (K 氏のお店の駐車場で) 車中泊をした女性からは後日電話で、「子ども食堂ネットワークに入らないか」などの提案や情報も舞い込んだ。

上記のように、M 氏は緩やかな食堂ネットワークに参加し、複数の食堂の運営に関わってきた。また K 氏は自らが経営している飲食店に訪れる災害ボランティアが形成した流動性の高いコミュニティに身を置いている。二人の語りからは、実践者のコミュニティとの接触を通して責任のある立場で支援活動を行う意識が芽生え、さらにノウハウの習得が行われるというプロセスが見出される。一方で実践者のコミュニティに身を置くことで意識して情報収集したことや、「何となく」身につけた情報・経験は言語化されないことも多い。

5.3 相手に届くボランティア

災害を機に始める新規参入者の支援活動には周りからの不信感や反対の声も伴う。M 氏が食堂の運営を開始した当初は、開催地域の民生委員から「年寄りに何を売りつけるつもりか!？」と疑われ、「やる気なくなるよね」と気を落とすこともある。しかし今となっては知らないうちに食堂の案内チラシが団地の回覧板に掲載されるほど、明言化されずも地域の人々に受け入れられつつある。似た状況に置かれていた K 氏も活動を継続することで逆風に挑んだ。

「最初は食堂運営の情報が欲しくて支援団体に相談に行ったら、受付の人に『あなたたちもすんの?』みたいに、ごみを見る目で見られていた。周りのお店の人からも『そんなに金儲けしたいの?』と散々悪口叩かれた。……今は向こう (行政) から『参加させてください、いつもありがとうございます』って言われるようになって…… (悪口を言う人々も (食堂の情報を発信している) ツイッターの投稿に毎回『いいね』を押してくれてるけど。継続してきたからいろんな声

がなくなった」[K氏 2019/7/21]

災害発生後、食事や食べ物の提供を行った K 氏は、被災者に安心して食べてもらうために「誰がどこでこの食べ物を作ったのか」「店ここにあるからなんかあっても逃げたりしない」と、支援活動をする際に経営する飲食店の名前を明かす必要があると考えた。しかし店で販売していた商品であるたいやき 10,000 匹を無料で提供したことで「売名行為」と言われ続け、共同運営者 K 氏の夫は「そんなに言われたら元をつぶせ」と決め、たいやきの販売を終了させた。こうした K 氏の活動を見守っている人が SNS 上に以下のようなコメントを綴っている。

「コンクリートの隙間から生えてきたタンポポを『頑張って咲いたわね』と言う人もいれば、『雑草が生えてきた』と言う人も。K さんは『枯れそうじゃない!』と水やりする人かと」

この応援コメントからは、新規参加者がさらされる厳しい世間の目に加え、それでもあきらめずに様々な可能性に賭ける K 氏の姿勢に対する評価が読み取れる。誤解や反対の声に対して M 氏と K 氏の受け止め方は異なっているが、両名とも活動を継続することを選んだ。この選択は彼女たちの揺るぎない信念とともに、何のために始めた活動なのかを自身の中で明確にしていることの表れであろう。この点に関しては、次の発言からより明確に理解できる。同じ支援者の立場である人の取り組みとの違いを捉える際に、M 氏、K 氏の両名はそれぞれこのように述べている。

「外に目を向ける人もいる。どどこよりおかげが多い、助成金が多い、参加者が多い。何のためにやっているのか。出る品数だったり、来る人だったり競争しない。それを比べたらおかしいやろ。趣旨に賛同する人であれば誰でも参加できる。野菜提供など協力できるだけでもいい」[M氏 2018/12/06]

「水害の翌年の 1 月、2 月あたりにすごいイベントが増えて……何人集まったか、どんなパフォーマンスがあったか、(被災者に)『うちに来てうちに来て』って営業電話になっている。人気取りは支援活動に必要無い。……私たちが恩返しされるためにやっているわけではない」[K氏 2019/7/21]

被災者の一人ひとりに向き合うための支援活動であるにもかかわらず、なぜ人数やパフォーマンスを競い合う必要があるのか、彼女らは理解に難を示した。そして上記の語りから、M氏とK氏は周りの批判的な声に抑圧されたまま自らの実践を否定するのではなく、むしろそういった構造や言説に線引きをしていることがわかる。K氏は短期間で複数の活動に参加することは被災者にとって負担になると考え、イベントの密集する時期に自分たちの食堂の運営回数を減らすことにした。共同運営者K氏の夫も、自分らの食堂運営を集客行為によって収入が発生する行為とは「一緒にされたくない」と捉え、「客商売じゃないから人集める必要ないし……困ってる被災者が来てそれでいい」と語った。またK氏夫婦は様々な支援団体と関わる機会が増える中で、「しっかり向き合ってくれる人と付き合うこと」を決めた。前出の「ごみを見る目で見られた」体験や、「相手に届けるためのボランティア」のスタンスがそう決めさせたのだろう。

6. 新しい目的のための資源のやりくり

第4節で述べたように、ブリコロールは利用可能なリソースが構成するレパートリーと向き合い、リソースの潜在的、顕在的な機能を見直し、代替案を見出すと同時に補充する作業も繰り返す。また「もっているものでなんとかする」だけでなく、「なんとかして手に入れたい」というようなリソースの追加作業も必要であろう。表2には調査データの特徴に基づき、運営者M氏とK氏が物的・人的リソースの有用性を認識し、リソースを追加するというレパートリーを編集・拡張する作業の結果をまとめた。本節では手元にある資源をもとに、運営においてリソースをどのように活用したのか、それでも足りないリソースをどのように獲得したかを具体的にたどっていく。

表2 食堂運営者 M 氏・K 氏によるレパトリリーの編集・拡張作業

	熊本市地域食堂 A の発起人 M 氏	倉敷市地域食堂 B の発起人 K 氏
リソースの有用性の再発見 一物的リソース	<ul style="list-style-type: none"> ・農家や NPO から寄付された食料でメニューを考える ・被災者が持ってきた古い帯でランチョンマットを作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の駐車場をボランティアの車中泊場所として提供する ・常連客が海で釣った魚を一品として出す ・余りものを物資として配り回す
リソースの有用性の再発見 一関係性の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・知り合いの農家に食材などの協力を求める ・託児サービス利用者の家族が氏子総代を務めている神社が食堂の場所を提供する ・各種資格の有無や調理する場所に悩んだが、「食堂=家族の食事の延長線」という意識転換 	<ul style="list-style-type: none"> ・店に訪れた災害ボランティアと飲み語る。飲食店利用者とサービス提供者という関係から先輩と後輩という関係へ ・仕入先に協力を求める。取引関係から災害支援の協力関係へ ・常連客の社協職員がプライベートで食堂に参加し、被災者の相談に乗る ・いじめられていたみなし仮設暮らしの少年が食堂の子どもの前でパフォーマンスをする
リソースの追加 (被災者の情報、被災者の信頼)	<ul style="list-style-type: none"> ・熊本地震後の様々な支援活動や祭りの場で被災者と顔見知りになることが被災者の参加につながった ・被災者を支援ネットワークの担当者につなげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・豪雨災害後の炊き出し、支援活動に多数参加している。「一番困ったときに食べた味は忘れない」と振り返り、被災者がボランティアとして食堂に参加する ・SNS、真備のゴミステーション（みなし仮設入居者が情報掲示板を見にくる）で呼びかける

6.1 物的リソースの有用性の再発見

一場面、一作業に際してブリコールは、所有するレパトリーがもつリソースのすべてを使うとは限らない。様々なリソースの潜在的な有用性がブリコールによって意識されるかどうかにかかわらず、眠ったままストックされ、次の場面に流用される。ブリコールはなぜリソースの有用性を発見することができたのか。既存システムによって提供されるものの正当性を問うことによって、代替リソースの優位性を意識することもある。たとえば、K氏は自らが経営している飲食店の駐車場を車中泊場所としてボランティアに提供した経緯について、次のように説明している。

「被災者も宿泊しているからホテルは満室だし、ボランティアが泊まる場所がない。行政が指定したボランティアの車中泊の場所を見に行ったら、工場の近くでコンビニもないし、夜は真っ暗。女性一人だったら絶対無理。うちのお店は駐車場もあるから、コンビニも近いし車中泊の場所として提供すればいいやん」[K氏 2019/7/22]

K氏は、既存システムに提供された車中泊場所の限界と所有する駐車場の利点を認識したうえで、所有する駐車場をボランティアに提供するという着想に至った。これはボランティアにより快適な環境で過ごしてもらいたいという親身な考え方に基づく発見とも言えよう。

またM氏とK氏は食堂の運営を始める前にもすでに持っているものを活用するだけでなく、寄付という形で寄せ集められてきたものも創意工夫して活用している。たとえば、M氏は被災者が持ってきた古い帯でランチョンマットを作り、参加者の前で意識して使うようにして「人間の付き合いはこういうことですよ」と筆者に説明したことがある。寄付されたものをただの「物」と考えずに向き合うことは、そのものを通してつながっている人の思いに応答するような作業が伴う、人間味に溢れる過程だと感じられる。このように二人のブリコールは寄付された物を優先して使用し、余った物をSNSなどでの発信を通して配布し、「善意を無駄にしない」ということを徹底しているように見受けられる。K氏へのインタビューでは「何かしたいけど、できない人がある」ということが言及されることも多かった。彼女はそ

のような人々を代弁するかのよう「ほんのちょっとした手伝い」をする機会を提供したと言えよう。

ブリコラージュの実践においては、最初から計画通りに物事を選別するよりも、ある程度の計画を意識しながらも積み上げ式でやりくりする必要がある。筆者の調査で印象深かった事例を紹介したい。ある日の食堂運営が終わった後、M氏に同行して別会議へ移動していた際に、同じく被災者に食事を提供する活動を行う別の支援者から、彼女が相談を受ける場面があった。その内容は、この支援者が実施する活動に参加しているボランティア間の人間関係がうまくいかないというものであった。直接的な原因は切り干し大根の切り方をめぐって、調理に関わる二名のボランティアの意見の不一致であったが、根本的な原因は双方が「うちの切り方でなければならない」と相手に譲らなかったことである。しかしどんな切り方でも支援活動の目的である被災者の利益とはさほど関係ないことであろう。支援活動の現場でやりくりするためには、職務や義務に支配されずに活動に参加する支援者一人ひとりの努力と責任感とは別に「抜け落ちを良しとする」という考え方も重要である。この点について食堂Aで調理する際に、M氏が「どんな味付けしようか」、「味見してみて、なんか足りないんだろうか」と食堂のスタッフや参加者であるみなし仮設の高齢者に声をかける様子もしばしば観察できた。また食堂Bでは、料理に疎そうな中高年男性や子どもと一緒に手巻き寿司の食材の準備する光景もよくみられた。手巻き寿司を巻きながら、焦げたり厚さがバラバラに切られた具を話のネタにするなど、抜け落ちを良しとして、失敗も多様性として活かす雰囲気は垣間見える。

6.2 関係性の変化による人的リソース有用性の再発見

M氏の運営している保育サービス事業の利用者や、K氏の経営している飲食店の客などを通して、仕事先の人間関係やネットワークが活用されていることも確認できる。たとえば食堂の場所として、M氏の活動を知った保育サービス利用者の家族が氏子総代を務めている神社の管理者と相談し、神社所有の集会所を提供している。また5.2で述べたように、客として飲食店に訪れたボランティアから、K氏が過去の被災地の支援活動に関する情報を入手するなど、サービスの利用者と提供者の関係に加え、災害支援の先輩と後輩のような関係も築かれた。K氏は「水害の前には社協なんて言葉、

聞いたことがない」と強調したが、たまたま同じ運営者である夫と相談し、常連客の中に社協の職員もいることを知り、プライベートで食堂に来てもらうようになった。仕事の際にできないような回答を「大きな声の独り言だから」と言い、被災者の再建相談に乗ることもあったという。食堂A、Bの運営過程において、このような関係性の変化による人的リソースの有用性の再発見の例は枚挙にいとまがない。

さらに活動を継続するためにも参加者に新たな役割を付与する、もしくは自ら役割を見つけてもらうといった思考の転換が求められる。M氏は「守ってくれる組織がないから、いろいろ逃げ道を考えなくてはならない」と活動開始後に不安に襲われたことを語る。各種資格の有無や調理する場所に悩んだ末、「食堂って家族の食事の延長線だな」と思うようになったという。その結果、衛生管理の問題に関しては、M氏が参加者に事前説明を行ったうえで、同意書にサインをしてもらうことになった。豪雨発生後、あるNPOが真備の床上浸水宅へのお弁当の配給活動を実施したが、K氏がその調理を引き受けて2カ月間3,080食もお弁当を作った。最後の日に配布地域にK氏が挨拶に行った際にある在宅被災者が「一番困ってた時に食べたあの味が忘れられない」と言い、その後も友達とともにボランティアとして食堂に参加するようになった。加えて、K氏は自身が行う食堂以外の支援活動の場で出会った、みなし仮設暮らしの少年とその母親を食堂活動を通して支援し続けた。「被災しながらもできるだけのことをしよう」と、この少年があるイベント会場でお菓子などを配ると、「被災者なのにお菓子を買うお金があるのか」と人から言われ、「いじめ」を受けていた。少年と母親に出会ったK氏が「私が前に出るから誰にもいじめはさせません」、「食堂に来て（参加者の）子どもたちと話すだけでもうれしいから」と声をかけ、食堂の参加を提案した。その後子どもたちが喜ぶグッズと一緒に手作りし、少年が得意な人気キャラクターのコスプレをして子どもたちと接するサポートをした。その結果少年は、食堂の活動に関わって以降、他人から悪口を言われなくなったという。

これらの関係性の変容は、寄せ集められた者の自己創発的な動きによるものだけでなく、二人のブリコロールが長年にわたり職場関係者と築いた信頼関係や、それぞれがもつ地域ネットワークを活用した結果でもある。そして彼女らが支援活動で出会った人々、食堂に寄せ集められた人々に「なん

とか関わってもらおう」とする場面もみられた。食堂の開催時に、M氏とK氏が必ず自分の位置を時々変えて参加者や運営スタッフ、臨時参加するボランティア一人ひとりの表情を見て声をかけ、相手の年齢や参加回数にかかわらず時間をかけて話を聞いた姿が印象深かった。このような行動を自然にできたのは、経営する飲食店のカウンターで飲んでいる客が寂しい思いをしていないか常に気を配っている習慣があるからだとしてK氏が捉えている。

6.3 リソースの追加

ブリコルールは「閉じている」資材の世界(レヴィ＝ストロース 1976:23)、「手元にある資源のみ」(Baker and Nelson 2005)など、有限なものだけでも問題解決に至ると主張する既存研究がみられる。しかし調査対象が置かれている環境によって、有限なリソースをもとに実践を積み重ねることで、リソースの強化や補充が可能であり必要であることも多くの研究者(Hatton 1989; グェン 2019 など)によって指摘されてきた。M氏とK氏の食堂運営には、前述の「物的リソースの有用性の再発見」と「関係性の変化による人的リソース有用性の再発見」を前提にしている「リソースの追加」という作業が確認できる。

M氏とK氏がそれぞれの実践コミュニティで体感・学習した情報やノウハウだけでなく、自ら行動し、獲得したものがある。災害支援の新規参加者にとって最も欠けているリソースとして、被災者の情報や被災者からの信頼というものがあげられる。特にみなし仮設入居者、在宅被災者の住所は個人情報保護の観点から非公開になっているため、見守り支援の委託事業者や公的機関に所属していない個人・団体による支援がきわめて困難である。民間への情報開示の方法の検討が不十分であることは、プレハブ仮設入居者とみなし仮設入居者の支援格差を生む一因である。

そのため、「被災者も知らない人のところに行かない」、「飲食店だから集客じゃないかって警戒される。みなし仮設の高齢者にどうやって警戒心をもたずに来てもらえるのか」とM氏、K氏が言うように、潜在的ニーズへの支援意欲がある新規参加者は、潜在的ニーズがどこにあるかを把握する必要がある。それに対してK氏の言葉に表れている通り、どのようなニーズを抱えているかの情報がない場合、「足で稼ぐ」必要がある。両名は災害

後の様々な支援活動や祭りに参加し、みなし仮設の被災者と顔見知りになったことが、被災者が食堂に参加するきっかけとなった。たとえば、M氏が音楽ボランティアとして参加したイベントの帰りに、みなし仮設の高齢者とバス停でバスを待ちながら立ち話をした。「今度は地域食堂をやるからよかったら来てくださいね」とM氏が案内したところ、ほかのイベントでもM氏を見かけたことがあるこの高齢者が「何度も会っているからご縁があるね」と話し、その後みなし仮設暮らしの友達や親戚を連れてきたという経験も聞かれた。また物資の配布に関する情報を、K氏が経営する店の前に新たに建設されたバス停にいる人に話した。その場には仮設団地のバス停で降りる被災者もいたので、物資の配布の情報が一気に広がった。

加えて前述のように、K氏が常連客の社協職員に依頼し、被災者の自宅再建の相談に乗ってもらったことや、M氏が罹災証明申請のタイミングを逃してしまった被災者を、彼女が所属する災害支援ネットワークにつなげたこともあげられる。これらの事実から、彼女らは食堂運営に災害支援や福祉制度に関する専門知をも取り入れ、被災者ケアに取り組んでいることがわかった。

7. まとめと展望

本稿ではブリコラージュ概念を用いて、被災地で立ち上げられた地域食堂の事例を通して、災害を機に支援を始める新規参入者の活動の創出過程を捉えてきた。まず調査対象である「食堂運営者の手元にある資源——利用可能なリソースによるレパートリー」の視点から、運営者二人の経歴、身を置いてきた流動的な実践コミュニティでの学習・体験、「相手に届く」ことを意識する活動スタンスを取り上げた。また、二人のブリコルールが「新しい目的のための資源のやりくり——レパートリーの編集・拡張作業」の視点から、「物的リソースの有用性の再発見」と「関係性の変化による人的リソース有用性の再発見」、さらに両者の延長線上の「リソースの追加」作業を確認できた。最後に以下の2点を通して補足しながら、本稿の知見をまとめる。

7.1 ブリコラージュのアプローチだからこそみてきたもの

手元にある資源をもとに新たな目的に向けてやりくりを行った結果、二人の新規参加者は、災害発生前からもつ社会的ネットワークの要素の潜在的有用性を災害支援という文脈で再認識し、組み合わせていた。また行動の先に偶然も重なって潜在的被災者にアプローチできたことや、専門知を取り入れることで被災者ケアにも取り組んでいたことなど、多様な制限に立ち向かうための新たな資源の獲得も行われていることが確認できた。

彼女らが実践コミュニティで体感したもののや、長年携わってきた災害支援以外の現場で築き上げてきた経験が、しばしば「無意識」な状態で、様々な場面で臨機応変に対応したという「結果」をもたらしている。しかしその結果に至るまでのプロセスは、ボランティアや参加者との関わりで「抜け落ちをよし」としながら、物的・人的リソースにさらにひと工夫を加えたことで出せる温かみのある手作り感で溢れている。資源の制約に立ち向かうには、リスクを背負いながらも参加者との合意で改善策を見つける。災害支援に関して「守るべき組織がない」ため、新規参加者ならではの現場での「裁量」(竹端 2012) や、自己奉仕型のリーダーシップが彼女らの実践の根底にあると言える。

ここまで取り上げてきた彼女らの実践は、「ありあわせのものでやりくりしている」ものの、「その場しのぎ」や「いい加減」ではなく、「時々思いつき」と「常にある創意工夫」で支えられている、という印象を抱かせるかもしれない。それは、本稿で取り上げた二人のブリコルールが自分自身の意欲だけでなく、物的・人的リソースに加え、被災者や活動を応援する人々の思いと向き合った結果・プロセスであるからだと考えられる。

筆者による最初のインタビュー調査において、M氏とK氏はいずれも自分の食堂運営を「行き当たりばったり」の活動と表現した。しかしM氏とK氏に対する調査を経て「本当は行き当たりばったりではなかったね」とつぶやいた場面も出てきた。実際に筆者が草稿段階の本稿をもちM氏に確認した際に、彼女は内容について「驚いた」と語り、「意識なくやっтерることなんだけど、周りにはそうみえたかもしれない。でもそれも事実だと思う」と感想を述べた。これまでも彼女らが様々な場面で食堂運営の経験や課題について求められ語ったことがある。しかしそれらには内包されないものに、

本稿では新たな視角から関心を向けた試みは、不十分ながらも接近できたことが示唆されている。

7.2 「よりよい災害支援」に、「災害支援よりよい何か」も

本稿では、二人の新規参加者の実践を災害支援の「正解」としてではなく「成解」(矢守 2009)として取り上げてきた。彼女らの支援創出過程で活用された資源の意外性や資源獲得ルートの偶然性が、私たちの視野を開こうとしている。神社の集会所、飲食店の常連客のつぶやき、バス停、「家族の食事」、いじめを受けた少年……これら日常生活の断片的要素こそが、災害支援の「ほかでありえた」可能性の再発見につながった。

このように様々な当事者への支援をブリコラージュの視点で見つめることは、私たちに「よりよい〇〇」よりも「〇〇よりよいもの」(井上 2011)を問いかける機会を提示する。既存システムの職員や専門家が現場で主観的な努力と善意のもとで問い直している「よりよい災害支援」を尊重しつつも、災害支援の枠からはみだした「災害支援よりよい何か」に関心を向けていきたい。この点に関連して、注目されて久しい「防災とは言わない防災」(渥美 2001:52)の取り組みもあげられる。また菅野(2020:17)は、専門化が行き過ぎた災害支援の「タコソボ化」へ違和感を抱き、「災害復興に特有な制度や文化に縛られるあまり、その時点で使える資源や仕組みを見落とし、最良の手段を確保できない状況」(菅野 2020:17)を懸念している。「よりよい災害支援」を意識するあまり、孤立している潜在的被災者がいるにもかかわらず手をこまねいてしまうという事態は最も避けられるべきことだろう。

最後に、本稿で取り上げた二つのブリコラージュ的な実践は、いずれも「特殊な」事例ではなく、「個性的」な事例であることを改めて強調したい。今後いずれ起きる災害を機に、様々な新規参加者による個性的な実践が現れ、展開されるだろう。M氏とK氏は潜在的被災者へのアプローチを意識しつつも、災害支援を活動の終点として考えずに、集まってくる参加者の特徴に合わせて平常時に移行した後の活動を見定めた。筆者の現段階の調査では、彼女らにとって食堂運営に欠かせないブリコラージュの作業を、「負担」として捉える語りは確認できなかった。「ありあわせのものをなんとか使おう」、「寄せ集められた者になんとか関わってもらおう」という作業は、

彼女らが食堂運営を始める前の人生でも実践されていたと考えられる。食堂運営のプロセスで更新されたレパトリーや挑戦への自信を手にし、彼女らはそれぞれ新たなブリコラージュの実践に向かっている⁽⁴⁾。

注

- (1) ブリコラージュは即興の一側面として議論する研究 (Moorman and Miner 1998; Cunha et al. 2003 など) だけでなく、即興はブリコラージュの一側面であると指摘する研究 (Harper 1987; Weick 1993 など) もみられる。論者によってブリコラージュと即興が言葉としてほぼ同じ意味で入れ替えることができる。しかし近年ブリコラージュより即興というコンセプトを使用する研究者が多いため、ブリコラージュは組織的即興の特徴として論じることが多い (Di Domenico et al. 2010)。本稿では分析視点として即興と区別してブリコラージュ概念を使用する。ブリコラージュは蓄積されるレパトリーの存在に依存する (Duymedjian and Ruling 2010)。この点において、「一瞬一瞬でしか即興と言えない」(王・稲場 2019:68) という行為の結果を強調する即興に比べて、ブリコラージュはプロセスを重視すると言えよう。
- (2) K氏が「子ども食堂」を考案したきっかけは、多くの被災者から「炊き出し等十分すぎる支援を受けてきた。そのうえ無料で食事を提供してもらっても、申し訳なく逆に来にくい。参加するなら、お金を払って堂々と食べに来たい」と言われたことである。そこでM氏は「調べてみたら、低料金で食事ができる『子ども食堂』の活動を知ったので、食堂を運営されている方に相談してもらい、システム等を考えてスタートした」。
- (3) この後続く議論では「自らをコミュニティに投げ入れるという『参加』」による実践を主な問題設定としている、「実践コミュニティ」(レイヴ・ウエンガー 1993) の概念が取り上げられている (田辺 2002:14)。実践コミュニティをめぐる議論は、「実践」、「レパトリー」といった概念を使用している本稿とある程度問題意識を共有しているものの、本稿の調査対象が置かれている状況の分析には馴染まない点がある。後述(「5.2 実践者のコミュニティとの接触」)の通り、本稿の対象者となる食堂運営者M氏は手伝う立場ながらもその他の食堂の設立や運営に関わっていた。それに対し、K氏は飲食店経営者というサービス提供者の立場として、被災地に訪れる災害ボランティアと接する中で、支援活動に必要な情報収集を行った。「自らをコミュニティに投げ入れる」よりも「気づいたら投げ込まれる」コミュニティが本稿の問題設定である。またK氏とM氏それぞれは、食堂運営者とボランティアという実践者の間に知識や情報の移転が発生していたものの、立場上の従属性は顕著ではない。つまり本稿の内容は「特定の技能集団に限定」(田中 2002:354)しやすいと示唆されている「実践コミュニティ」の議論には及ばない。加えてレイヴとウエンガー(1993)によって提示された実践コミュニティ論は、行為主体が「学習者」として知識や技能を修得する過程に議論の重心を置き、行為主体の創造性や「変革者」としての側面を説明するための理論的不足が指摘されている (田中 2002)。この点は、食堂運営者が状況に適応しながらも創意工夫し食堂の個性的なあり方を形成している

という本稿の強調点とは相反している。さらに Wenger (1998) によって提示された「レパートリー (repertory)」の概念について、田辺 (2003) は「日常的に稽古しながら習熟され、しかもつぎつぎと実践を生みだす一連の資源」(田辺 2003:118) と捉えている。コミュニティの中の人々の相互作用によって資源が蓄積され、さらに共有されていくという考え方は本稿の議論にも示唆を与えるが、学習プロセスを明らかにするためのアプローチだと考えられる。したがって本稿での議論は、基本的にレヴィ=ストロース (1976) とその関連議論によって提示されたレパートリーの概念を用いる。

- (4) 実は二人の新規参加者の実践について後日談がある。2020年現在コロナ禍の中でM氏は食事を提供する活動の代わりに、手作りおもちゃキット入りフードパントリーの提供を実施している。またK氏は食堂収束後に被災者と始めた障害者のサポート事業で利用者とともに手作りマスクを販売している。再び訪れた未曾有の事態に彼女らは新たな形のブリコラージュ実践にたどり着いた。ブリコールの実践は前のものを作ったり壊れたりしたときの残り物で維持されている。彼女たちの実践も機会があればストックが更新されるだろう。こうしたブリコラージュ的な実践はある一定のきっかけのもとでの社会構成要素の主体的な運動であり、機能的な意義を変えながら存続していく。

参考文献

- Baker, Ted. and Reed Elliot Nelson. 2005. Creating Something From Nothing: Resource Construction Through Entrepreneurial Bricolage. *Administrative Science Quarterly* 50(3):329-366.
- Barney, Jay B. 1991. Firm Resources and Sustained Competitive Advantage. *Advances in Strategic Management* 17(1):3-10.
- Corbett-Etchevers, Isabelle., Aura Parmentier Cajaiba and Giovany Cajaiba-Santana. 2014. Bricolage Perspective on Strategizing Tools: A Comparative Case Study. *Gredeg Working Papers* 47:1-42.
- Cunha, Miguel Pina., Ken Kamoche and Rita Campos Cunha. 2003. Organizational Improvisation and Leadership: A Field Study in Two Computer-mediated Settings. *International Studies of Management and Organization* 33(1):34-57.
- Di Domenico, MariaLaura., Helen Haugh and Paul Tracey. 2010. Social Bricolage: theorizing social value creation in social enterprises. *Entrepreneurship Theory and Practice* 34(4):681-703.
- Duymedjian, Raffi and Charles-Clemens Rüling. 2010. Towards a Foundation of Bricolage in Organization and Management theory. *Organization Studies* 31(2):133-151.
- Harper, Douglas. 1987. *Working knowledge: Skill and Community in a Small Shop*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hatton, Elizabeth. 1989. Levi-Strauss's bricolage and theorizing teachers' work. *Anthropology and Education Quarterly* 20(2):74-96.

- Innes, Judith E and David E. Booher. 1999. Consensus Building as Role Playing and Bricolage. *Journal of the American Planning Association* 65(1):9–26.
- Moorman, Christine and Anne S. Miner. 1998. Organizational Improvisation and Organizational Memory. *The Academy of Management Review* 23(4):698–723.
- Stebbins, Robert. 1996. Volunteering: A Serious Leisure Perspective. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly* 25(2):211–224.
- Weick, Karl E. 1993. The collapse of sensemaking in organizations: The Mann Gulch disaster. *Administrative Science Quarterly* 38:628–652.
- Wenger, Etienne. 1998. *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. New York: Cambridge University Press.
- 朝日新聞 2018 「広がる『子ども食堂』、全国 2286 カ所 2 年で 7 倍超」2018 年 4 月 4 日朝刊 <https://www.asahi.com/articles/ASL43573TL43UTFK010.html> (2020/12/01 アクセス)
- 渥美 公秀 2001 『ボランティアの知—実践としてのボランティア研究』大阪：大阪大学出版会。
- 渥美 公秀 2008 「即興としての災害救援」山住勝広・ユーリア・エンゲストローム編 『ノットワーキング—結び合う人間活動の創造へ』 pp.207–230、東京：新曜社。
- 渥美 公秀 2009 「災害ボランティア活動が文化になるということ」『国づくりと研修』 124: 18–20。
- 渥美 公秀 2014 『災害ボランティア—新しい社会へのグループ・ダイナミックス』東京：弘文堂。
- 井上 芳保 2011 「ブリコラージュとしての精神医療」『社会情報』 20(2): 15–30。
- 内田 樹 2010 「ブリコラージュ的知性について」内田樹・平川克美『東京ファイティングキッズ・リターンズ—悪い兄たちが帰ってきた』 pp. 100–112、東京：文藝春秋。
- 王 文潔・稲場 圭信 2019 「災害対応における創造的即興—熊本地震被災地の実践を事例に」『災害と共生』 3(1): 57–69。
- 金井 信子 1996 「イニシアティブはボランティアの手に」本間正明・出口正之編『ボランティア革命』 pp.19–42、東京：東洋経済新報社。
- クロード・レヴィ=ストロース 1976 『野生の思考』大橋保夫訳、東京：みすず書房。
- グエン・チ・ギア 2019 「資源制約への対応—ブリコラージュ理論の再検討と修正」『組織科学』 53(1): 37–52。
- 玄田 有史 2018 「自信がない・準備もない—その背景にあるもの」東大社研・玄田有史・有田伸編『危機対応学—明日の災害に備えるために』 pp.49–108、東京：勁草書房。
- 鴻巣 麻里香 2018 「多職種連携、その前に—ソーシャルワークとソーシャルアクショ

- ン」山登敬之編『対話がひらくこころの多職種連携 こころの科学増刊』pp.46-54、東京：日本評論社。
- 西條 剛史 2012『人を助けるすんごい仕組み—ボランティア経験のない僕が、日本最大級の支援組織をどうつくったのか』東京：ダイヤモンド社。
- 菅野 拓 2020「私の災害復興研究—災害復興を災害復興研究として扱わない」『復興通巻第22号』8(4): 15-18。
- 杉岡 直人・畠山 明子 2016「地域食堂の活動と類型化に関する一考察」『北星学園大学社会福祉学部北星論集』53: 1-10。
- 関 嘉寛 2014「ボランティアから捉える現代社会」内海成治・中村安秀編『新ボランティア学のすすめ—支援する/されるフィールドで何を学ぶか』pp.54-78、京都：昭和堂。
- 竹沢 尚一郎 2013『被災後を生きる—吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論新社。
- 竹端 寛 2012『枠組み外しの旅—「個性化」が変える福祉社会』東京：青灯社。
- 立木 茂雄 2016『災害と復興の社会学』奈良：萌書房。
- 田中 雅一 2002「主体からエージェントのコミュニティへ—日常の実践への視角」田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』pp.337-360、京都：世界思想社。
- 田中 弥生 2011『市民社会政策論—3・11後の政府・NPO・ボランティアを考えるために』東京：明石書店。
- 田辺 繁治 2002「日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ」田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』pp.1-38、京都：世界思想社。
- 田辺 繁治 2003『生き方の人類学—実践とは何か』東京：講談社。
- ハイデガー、マルティン 1960『存在と時間 (中)』桑木務訳、東京：岩波文庫。
- 林 春男 2016「災害対策の標準化について—2030年までに全国規模の効果的な広域応援を可能にする災害対応の基本的な仕組みを構築する」『平成27年度地域防災データ総覧「災害対策の標準化へのアプローチ編」』pp.3-11、http://www.isad.or.jp/bousai_img/data/H27_tokubetsukikou1.pdf (2020/12/01 アクセス)
- 山下 祐介・菅磨 志保 2002『震災ボランティアの社会学』京都：ミネルヴァ書房。
- 矢守 克也 2009『防災人間科学』東京：東京大学出版会。
- 湯浅 誠 2017『「なんとかする」子どもの貧困』東京：角川書店。
- レイヴ、ジーン・ウェンガー、エティエンヌ 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』佐伯胖訳、東京：産業図書。